

# 地域資源としての農村景観と持続的な地域振興

## 佐賀県旧相知町蕨野地区の棚田を事例に

藤永 豪<sup>1</sup>, 五十嵐 勉<sup>2</sup>

### Rural Landscape as a Regional Resource and Sustainable Rural Development - A Case Study of the Terrace Paddy Fields in Warabino District, Former Ouchi Town, Saga Prefecture -

Go FUJINAGA, Tsutomu IGARASHI

#### 要 旨

本研究では、佐賀県旧相知町蕨野地区における棚田の景観保全とこれをめぐる地域住民の活動をと  
おして、農村の持続的な地域振興の可能性と課題について考察した。蕨野地区の棚田は、2008年7月  
に国の重要文化的景観に選定されている。同地区では、この棚田景観を活かした地域振興を実践する  
ために、NPO 法人が結成され、生産組合や婦人会などの既存の組織を巻き込みながら、さまざまな  
イベントを開催するなど、都市農村交流事業を活発に展開している。同時に、行政やJA などの協  
力体制を整え、棚田という環境を付加価値としたブランド米の販売にも力を入れている。こうした棚  
田を核とした新たな「テーマ的地縁組織」が、高齢化や離農によって、衰退しつつあった集落の社会  
的機能や生産機能を再び高めていく上での重要な役割を果たしている。ただし、その一方で、企画・  
運営を担う若い人材の育成や活動資金の調達、専門的な知識と情報をもたらす外部の助言・協力者の  
継続的な確保など、いくつかの課題も内包している。

#### I はじめに

2004年に改正され、2005年4月1日に施行され  
た新たな文化財保護法では、これまでの有形無形  
の“わが国の歴史や文化を象徴する”ような特徴  
的な歴史・民俗的遺産のみでなく、「地域におけ  
る人々の生活又は生業及び当該地域の風土により  
形成された<sup>1)</sup>」文化的景観が、その対象とされる

こととなった(図1)。この改正文化財保護法に  
おける重要文化的景観の選定基準は、以下のよう  
に定められている。

一…地域における人々の生活又は生業及び当該  
地域の風土により形成された次に掲げる景観  
地のうち我が国民の基盤的生活又は生業の特  
色を示すもので典型的なもの又は独特のもの

- (1) 水田・畑地などの農耕に関する景観地
- (2) 茅野・牧野などの採草・放牧に関する

1 佐賀大学 文化教育学部 地域・生活文化講座

2 佐賀大学 農学部 地域社会開発学講座

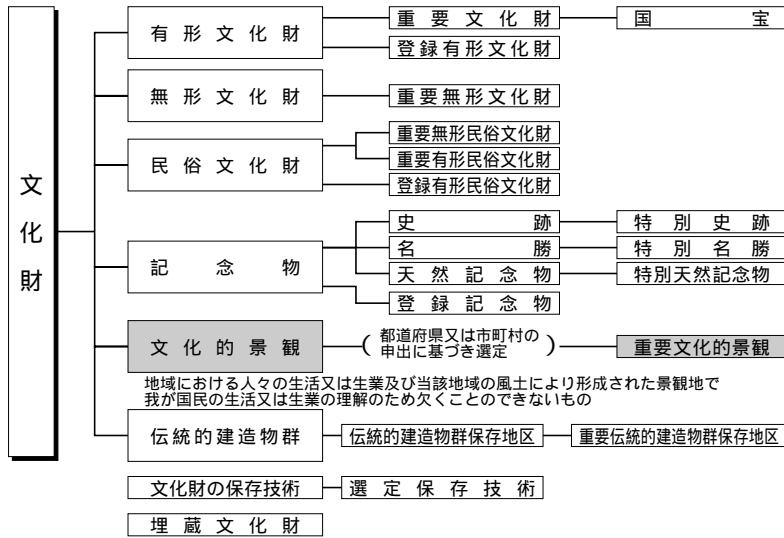


図1 改正文化財保護法における重要文化的景観の位置づけ  
(文化庁文化財部記念物課資料より引用)

景観地

- (3) 用材林・防災林などの森林の利用に関する景観地
- (4) 養殖いかだ・海苔ひびなどの漁ろうに関する景観地
- (5) ため池・水路・港などの水の利用に関する景観地
- (6) 鉱山・採石場・工場群などの採掘・製造に関する景観地
- (7) 道・広場などの流通・往来に関する景観地
- (8) 垣根・屋敷林などの居住に関する景観地

二...前項各号に掲げるものが複合した景観地のうち我が国民の基盤的な生活又は生業の特色を示すもので典型的なもの又は独特なもの  
(平成17年3月28日文科科学省告示第47号による)

すなわち、地域に生きてきた人々が、地域の自然環境の下、長い歴史の中で築き上げてきた生活や風土と深く結びついた地域固有の景観の重要性が認められることになった。その範疇には、「里山」という言葉に代表されるような農山村を構成

する空間的要素(あるいはその複合体)そのものが含まれている。こうした重要文化的景観は、「我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの<sup>2)</sup>」であり、その保護の目的は、「その文化的な価値を正しく評価し、地域で護り、次世代へと継承<sup>3)</sup>」していくことにある。

同時に、このような積極的な文化遺産としての農山村景観の保護は、地域振興の材料としても活用されている。同様の動きは、白川郷などの世界文化遺産でもみられ、自地域の文化を資源とし、「商品」として売り出すことで、農山村の維持、持続的発展を図ろうとするものである(藤永2006, 2011)。加えて近年では、単なる自立的な経済基盤の確立のみでなく、並行してそこから地域アイデンティティーの創出を目指した活動も盛んになってきている。本稿では、こうした農山村の新しい動きを踏まえ、2008年に国の重要文化的景観<sup>4)</sup>に選定された佐賀県旧相知町(現唐津市)の蕨野地区における棚田景観の保全活動と地域振興の関わりについて報告する。蕨野地区では、棚田を活用した都市農村交流を促進し、高付加価値米を販売するなど、様々な地域おこしに関する取り組みを行っている。

## Ⅱ 蕨野地区の棚田と景観

蕨野地区は、佐賀県のほぼ中央、筑紫山地八幡岳（標高764m）の北麓に位置し、佐賀市および福岡市からともに車でおよそ1時間の距離にある（図2）。2005年3月における人口は225、総戸数は65である。そのうち、農家数は51戸で、第2種兼業農家が35戸と全体のおよそ69%を占める。同地区の棚田は、集落南部の八幡岳中腹、標高150～420mの斜面に広がり、その面積はおおよそ45.4ha、枚数838の規模を誇る（写真1）。

蕨野地区における棚田の開発は、江戸時代中期に始まり、明治期から昭和初期にかけて、急速に進んだ。これは、ため池による灌漑技術の進展と関係している。もともとは切替畑として八幡岳の斜面を利用していたものだが、のちに常畑、段々畑へと変化し、現在の棚田景観を形成するに至った。

また、この棚田景観を形作る特徴的な要素として、野面積みの石垣が挙げられる（写真2）。この石積み棚田は、「石垣棟梁」と呼ばれる石積み職人を中心とした「手間講」と称される共同作業によって造成されたものである（唐津市教育委員会 2008）。さらに、この棚田には暗渠と呼ばれる地下式用排水路が設置されるなど、高度な土木技術と知恵がその景観を支えている。

蕨野地区の農業は、こうした棚田における稲作を基軸に成立していたが、1960年代より、人口流出と兼業化が進み、耕作放棄地が増加するとともに、スギやヒノキの植林が実施された。1970年代には、ミカンやスダチの栽培が盛んとなったが、その後の価格低迷により果樹園の放棄が進行し、再び、高齢化や離農によって耕作放棄地が増加傾向にあった。

このような状況の中で、蕨野地区では、棚田の保全を中心とした地域振興にかかわる活動が、地区内外の個人やさまざまな組織等を巻き込みながら展開されていくことになる。次章では、こうした同地区における地域振興の動きと流れについて考察していく。



写真1 蕨野の棚田

（唐津市教育委員会（2007）より引用）

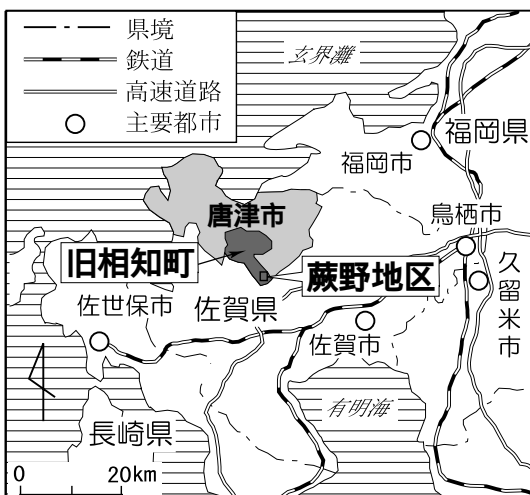


図2 蕨野地区の位置



写真2 棚田の高石積み

（2011年1月 藤永撮影）

### Ⅲ 蕨野地区における棚田保全活動の展開と地域振興の動き

表1に、蕨野地区におけるこれまでの棚田保全にかかわる動きと流れについて、概略を示した。この表からも分かるように、同地区では、1980年代より棚田保全と地域振興のためのさまざまな組織が作られるとともに、現在まで数多くのイベントが継続的に開催されてきた。以下、この表をもとに、蕨野地区における地域振興の動きと流れについて、これにかかわる各組織とイベント活動を中心に述べていく。

#### 1. 地域資源としての棚田の再発見

蕨野地区における地域振興の契機となったのが、1980年代に、地元有志により結成された「ふる里会」である。ふる里会は、高度経済成長期を境に、人口流出と兼業化の進む蕨野地区の状況に危機感を抱いた、当時の30～40歳代の若手の住民によって作られた組織である。頻繁に会合を開き、同地区の将来について話し合いを行った。同会は、その後結成された各組織を生み出す基盤となり、各種イベント活動を展開する上で、中心的な役割を果たすこととなる。その具体的な活動の第一歩が1996年に発足した「住みよい蕨野を考え

表1 蕨野地区における棚田保全にかかわる動き

年次	集落の動き	行事等
1970	蕨野浮立の復活	
1980	「ふる里会」発足	
1996	「住みよい蕨野を考える会」発足 住民アンケートの実施、「住みよい蕨野マップ」作成	
1997	「佐賀県むらぐみ発展運動重点地域」に指定	農業体験バスツアー開催（2000年まで）
1999	「日本の棚田百選」に選定	
2000	佐賀県推奨品種「夢しずく」の栽培開始 全国棚田サミットへ参加開始（現在まで） 「蕨野棚田実行委員会」発足 旧相知町長による棚田戦略開始	
2001	棚田米「蕨野」の直売運動開始 「蕨野棚田保存会」発足 九州米サミット普通作部門において最優秀賞受賞 「棚田米蕨野」商標登録	「早苗と棚田ウォーク in 相知」開催（現在まで） 「千枚棚田の菜の花種まき交流会」開催（現在まで） 「親子棚田農業収穫祭」開催（現在まで） 「菜の花スカイウォーキング大会」開催 「菜の花レストラン」開催 「菜の花ジュウタンづくり」開始（2005年まで） 「石積みに芋ば植えちゅうかい」開催 「石積みで芋ば掘ちゅうかい」開催 「棚田発見塾」開催（2003年まで）
2002	読売新聞社「遊歩百選」に選定 「棚田と菜の花フェスティバル実行委員会」発足 「佐賀県農業賞（活力のある村づくり事業）」受賞 蕨野の棚田保存会、佐賀新聞社「社会大賞」受賞	「親子棚田ふれあい農業体験交流会」開催（現在まで） 「親子棚田農業収穫祭」開催（2004年まで） 「菜の花ハイクと屋台村」開催（現在まで） 「商い繁盛塾」開催
2003	「九州農政局長賞（豊かな村づくり事業）」受賞 佐賀大学農学部との「棚田の保全・利活用協定」締結 新「手間講隊」活動開始	
2004	「第10回全国棚田サミット」開催 「交流広場」オープン	
2005	「棚田と菜の花実行委員会」発足 農産物直売所の設置	「親子棚田そば収穫祭」開催（現在まで）
2006	国の重要文化的景観選定のための基礎調査開始	「田植え体験交流会」開催（現在まで） 「稲刈り体験交流会」開催（現在まで）
2007		「ふるさとの灯りを囲む会」開催（現在まで）
2008	国の「重要文化的景観」に選定 「棚田学会賞」受賞	
2009	特定非営利活動法人「蕨野の棚田を守る会」設立	

（唐津市資料および首藤（2009）、聞き取り調査により作成）

る会」である。この会では、どのようにしたら弱体化していく地域を再生できるのか、その基礎調査として、住民アンケートを実施した。このアンケートでは、五百羅漢<sup>5)</sup>などの地区内に祀られている信仰対象地物のほか、蕨野を象徴する「棚田」の保存などが住民からの主な要望としてあがってきた。同会では、この調査をもとに、いわゆる地域資源マップとして、「住みよい蕨野マップ」を作成するなど、具体的な活動を始めた。中でも、棚田の保存に関する要望や意見は、ふる里会の活動方針の基軸となった。1997年には、「佐賀県むらぐらみ発展運動重点地域」に指定され、「農業体験バスツアー」などのイベントを実施した。その後、1999年に蕨野地区の棚田が「全国棚田百選」に選ばれ、翌2000年には「全国棚田サミット」に初めて参加するなど、地域資源としての棚田の価値が地区住民によって、改めて認識されるようになった。

## 2. 棚田を付加価値としたブランド米の生産・販売

蕨野地区では、2000年より中山間地域直接支払制度への取り組みが始まる。これによって、棚田を活用した具体的な取り組みが集落協定に盛り込まれることとなった。その一つが、棚田で生産した米のブランド化であった。そこで、まず、県の推奨品種であった「夢しずく<sup>6)</sup>」の栽培を始めることにした。栽培にあたっては、県の農業改良普及センター等の指導を受け、JA や自治体と協力しながら販路の開拓に取り組んだ。2001年には、これを棚田米「蕨野」として販売するに至った(写真3)。棚田米「蕨野」は、棚田の“清らかな水”で栽培した高品質のブランド米として売り出され、同年の九州コメサミット普通作部門において、最優秀賞を受賞した。価格も当初は、5 kgあたり2800円であったが、2003年には3150円に改定され、ブランド米としての一定の地位を得るに至った。作付面積と販売量も、2001年のおよそ7 haと31tから2008年にはおよそ17haと55tへと増加した。こうした棚田米「蕨野」の生産・販売において中心的な役割を果たしているのが、2001年



写真3 棚田米「蕨野」

(2010年10月 藤永撮影)

に夢しずくの生産農家36戸によって設立された「蕨野棚田保存会」である。同会は、旧相知町の支援を受けながら、JAの農産物直売所での販売をはじめ、通信販売の開始、佐賀市の地元資本の百貨店や宿泊施設等との提携を成功させるなど積極的に広報や販路拡大のための活動を行ってきた。

## 3. 都市農村交流事業と棚田の商品化

棚田米「蕨野」の反響は、改めて蕨野地区の住民に棚田の地域資源としての重要性を示すこととなった。そして、この時期から棚田を活用した都市農村交流事業が活発化していくことになる。表1に示したように、2001年以降、「早苗と棚田ウォーク in 相知<sup>7)</sup>」、「千枚棚田の菜の花種まき交流会」、「菜の花ジュウタンづくり」、「親子棚田ふれあい農業体験交流<sup>8)</sup>」、「親子棚田農業収穫祭<sup>9)</sup>」、「菜の花ハイクと屋台村」、「ふるさとの灯りコンサート」といった数多くのイベントが年間を通じて催されている(写真4・5)。こうしたイベント開催の目的は、単純に都市住民との交流を図るだけでなく、消費者に実際に棚田を体験してもらうことで、棚田米の新たな消費者を獲得すると



**写真4 菜の花ハイク  
田植え前の菜の花が咲く棚田を歩く**  
(2010年3月 五十嵐撮影)



**写真5 ふるさとの灯りコンサート  
収穫後の棚田を利用して開催される**  
(2010年10月 藤永撮影)

もに、すでに購入している人々には、自分たちが買っている米がどのような環境で栽培されているのかを理解してもらい、リピーターとして定着させることにある。そのためには棚田の保全が不可欠であり、1998年からは休耕田や収穫後の水田に菜の花やヒガンバナなどの景観作物を作付けし、棚田全体の景観向上に取り組むようになった。2000年には、区長をはじめとする役員やふる里会、生産組合、婦人会、消防団などで「蕨野棚田

実行委員会」を結成し、前述の各種イベントの実行にあたった。

つまり、近年の消費者の食に対する安全・安心志向の高まりの中で、良好な棚田景観を商品とし、各種イベントをとおして消費者である都市住民に提供することで、棚田米「蕨野」をメインとした蕨野地区の農産物のイメージアップを図り、さらなる棚田米の販路拡大を目指したのである。その後、蕨野棚田実行委員会は、「棚田と菜の花フェスティバル実行委員会」、「棚田と菜の花実行委員会」と名称を変えながら、現在まで棚田の保全と景観づくりとこれに関するイベント実施を継承している。

ここで注意しておきたいことは、景観作物として導入された菜の花の作付けが、棚田米「蕨野」の栽培とも深く結び付いている点である。棚田米「蕨野」の付加価値は、雑排水の流入しない“清らかな水あふれる棚田”において栽培されていることから生じている。したがって、化学肥料は論外のこと、棚田の間を流れ下る水を“汚してしまう”堆肥等を大量に投入することはできない。そこで、緑肥ともなる菜の花が選択されることとなった。結果として、菜の花は、棚田米の付加価値付けの前提条件となる有機栽培と棚田の商品化のための景観向上の2つの点において好都合だったわけである。さらには、これに関して、2004年に県の特別栽培農産物の認証を取得し、エコファーマーの認定農家も増加した。

加えて、これら蕨野地区の取り組みは社会的にも評価され、2002年に、「佐賀県農業賞（活力ある村づくり事業）」と佐賀新聞社「社会大賞」を、2003年には「九州農政局長賞（豊かな村づくり事業）」を受賞している。こうした社会的評価は、蕨野地区の農産物の評価を高めるとともに、住民たちの地域アイデンティティの醸成にもつながっている。

このほか、2004年に、「交流広場」を設置し、都市農村交流の拠点とするとともに、蕨野地区を会場に、「第10回全国棚田サミット」が開催された。翌2005年には、交流広場に「直売所」を開設

するなど、観光資源としての棚田の活用事業が進展した。

また、こうした蕨野地区の取り組みにおいて忘れてならないのが、消防団や婦人会などの既存の社会組織である。例えば、消防団は、比較的若い住民から構成され、非農業従事者も含まれるにもかかわらず、これまで述べてきた各種イベントの実行部隊としてまとまりを崩すことなく活動している。また、婦人会の存在意義も大きい。表向きの活動は男性を中心としたふる里会や棚田保存会によって実行されているが、その舞台裏で、イベントの下準備や炊き出しなど、地区外部の都市住民を迎えるにあたって、女性たちの協力は欠くべからざるものであり、むしろ、彼女たちの献身的な支援がなければ、こうした地域振興にかかわる各種行事は成り立たないといえる。田林（2000）や井口（2009）が指摘するように、今日の農山村において、女性はムラを支える重要な活動の担い手なのである。すなわち、蕨野地区における都市農村交流事業は、非農業従事者や女性を含めたすべての住民の協力の上に成り立つものであり、そこに同地区における地域コミュニティとしての強い基盤が見え隠れする。

#### 4. 教育ファームとしての活用と国の重要文化的景観の選定

蕨野地区における地域振興の動きに大きな影響を与えたのが、2003年の佐賀大学農学部との「棚田の保全・利活用」に関する地域協定である。佐賀大学では、文部科学省の「地域貢献推進支援事業（平成15～16年度）」に採択されたことで、「佐賀大学地域創生学生参画型教育プログラム」と銘打ち、蕨野地区の棚田において農学部を中心にフィールド教育を主体とした教育実践活動を行ってきた<sup>10)</sup>。この教育プログラムでは、有機栽培実験・実習だけでなく、里山再生や食農・環境教育、地域コミュニティに関する社会調査など、さまざまなフィールド型の教育が組み込まれ、蕨野地区の活性化とあわせて教育現場としての棚田の活用が図られた。その具体的取り組みの一つが

「手間講隊」の結成と実践であった。先に述べたように、「手間講」とは、農業に関する共同諸作業のことを指す。2002年に、棚田保存会より耕作放棄地の一部を活用してほしいという申し出が佐賀大学農学部であり、この復田作業を担うため



写真6 手間講隊による復田作業

（2003年4月五十嵐撮影）



写真7 手間講隊による棚田の復元状況

（上：復元前の耕作放棄地 下：現在の圃場）

に、地元住民の協力を得て結成されたのが、教員と学生を中心とする援農組織「手間講隊」であった(写真6・7)(五十嵐監修2003)。最終的には、およそ9反の耕作放棄地を人海戦術で開墾し、うち7反を実験農場として利用し、残り2反を一般市民に無料で貸し出している。現在、復元した実習田は、農学部附属のフィールドセンターの教員と学部の3年生から大学院生までの20名ほどが有機栽培の実習・実験や在来種の保存実験などに活用している。ただし、この手間講隊は、復田を主な目的としたものであり、その作業が終了した後は明確な形を持って活動は行っていない。しかしながら、手間講隊の活動内容は、その後も棚田を利用する農学部の各教員や学生たちに引き継がれており、用水路の清掃や草刈りの手伝い、イベント開催の支援など、蕨野地区のさまざまな活動場面で地元住民との協力関係がみられる。とりわけ、地理学や社会学、人類学を中心とする人文社会科学系の研究室では、地域づくりやコミュニティ再生など実践的な農村開発に関する教育活動を展開しており、毎年、学生が蕨野地区に入り込み、同地区の各種イベントや農作業に従事するとともに、その調査内容や実績を卒業論文や修士論文の作成につなげている。こうした継続的な棚田の教育ファーム<sup>11)</sup>としての活用は、その後の国の重要文化的景観選定にもかかわることになる。

蕨野地区において、重要文化的景観選定への動きが本格化するのは2006年である。この重要文化的景観の選定は、市町村からの申請に基づくものであり、事前に基礎調査と保存・管理・活用計画を策定することが求められている。そのため、地元住民だけでなく唐津市や佐賀大学も選定に向けて大きな役割を担うこととなった。中でもその中心となったのが、本稿の執筆者の1人、五十嵐であり、「蕨野の棚田」文化的景観保存管理計画策定委員会」が設置され、蕨野地区の基礎調査と保存・管理・活用計画の策定が図られた。同時に、地元ワークショップも開かれ、申請へ向けた動きが本格化した。この過程には、佐賀大学の学生も参画し、教育と地域振興のための実践活動が一体

となって展開された(五十嵐 2008)。その結果、2008年1月に文化庁への申請を終え、同年7月に蕨野の棚田は国の重要文化的景観に選定された。この重要文化的景観の選定は、佐賀大学による教育実践活動を含めた、蕨野地区におけるこれまでの棚田の保全・利活用の一つの成果であり、新たな地域振興の出発点ともいえる。

棚田景観の保存・管理・活用にあたっては、2009年に設立された特定非営利活動法人「蕨野の棚田を守る会」が運営の中心となっている。2010年9月現在、議決権を有する正会員56名、議決権を有しない賛助会員108名で、会費はともに年間1,000円である。議決には正会員3分の2以上の賛同が必要であるが、正会員は地元住民45名、外部の住民11名から構成され、地元の意向が反映されるよう考慮されている。外部からの正会員は、佐賀大学農学部の教員や棚田米の取引先である地元百貨店の重役、JA 唐津の役員、元唐津市職員など、蕨野地区と深いかかわりを持つ人々である。賛助会員は、主として棚田米購入者やイベント参加者であり、中には「棚田学会」の会員も含まれている。理事会は10人で構成され、そのうち6人が歴代の区長や棚田保存会会長など、地域コミュニティにおける主要人物である。残りの4人が、佐賀大学教員、百貨店重役、JA 役員であり、棚田はあくまで「地元のもの」としながらも、外部からの意見も取り入れられるような体制をとっている。

また、同会の重要な役割の一つは、運営資金の獲得にある。2009年度は、九州労金助成金(20万円)やさが食と農の絆づくりプロジェクト助成金(30万円)などを受け、活動資金とした。2010年度は富士フィルム・グリーンファンドから220万円の助成を受けることになっている。農業に関する補助金に加えてこうしたコミュニティ支援のための多様な外部資金をいかに継続して獲得し、運営に当てていくのが今後の課題である。



#### Ⅳ．今後の棚田保全と持続的な地域振興にむけて

以上、佐賀県旧相知町蕨野地区における棚田保全活動をおとした地域振興について、述べてきた。蕨野地区では、1960年代以降、人口流出と兼業化に拍車がかかり、さらには、棚田の放棄、植林、畑地化が進行した。こうした状況に危惧を抱いた地元の若手構成員を中心に、ふる里会を結成し、その対応策を模索した。その結果、同会を基軸に、蕨野地区の住民たちは、自分たちのムラを存続させていくために、棚田景観を活かした地域振興への道を歩み始める。行政やJAなどとの協力体制を整え、棚田という環境を付加価値としてブランド米を確立させ、独自の販路を切り開いた。棚田米生産を中心とした地域振興活動をさらに広げるため、新たに蕨野棚田実行委員会を結成し、生産組合や消防団、婦人会などの既存の組織を巻き込みながら、さまざまなイベントを開催するなど都市農村交流事業を展開した。この事業によって棚田米購入のリピーターを確保し、新たな消費者の獲得に成功した。そして、タイミングよく、地域貢献活動を求められていた地元大学の農

学部との連携事業が生まれることになる。手間講隊による棚田再生活動や実践的な教育活動が教育ファームとしての棚田の資源価値を高め、そのことがさらなる棚田保全と地元住民の地域アイデンティティの醸成につながっていった。このころ受賞したさまざまな社会的評価も地域振興への機運を高めることとなった。その成果として、国の重要文化的景観の選定が位置づけられよう。圃場整備など戦後のわが国における農政から取り残された地域が、むしろナショナルスタンダードから外れた、いわば、“規格外品”としての不利な条件を、逆に資源として活用し、その特徴的な景観を“商品”として前面に押し出して地域振興に結び付けたことが蕨野地区の成功の鍵といえる。

では、今後、蕨野地区における棚田を基盤とした地域振興は、どのような可能性と課題を有しているのだろうか。最後に、この点について整理したい。図3に、特定非営利活動法人「蕨野の棚田を守る会」を中心とした、現在の同地区における棚田保全活動と地域振興にかかわる組織の関係を示した。蕨野地区では、棚田と菜の花実行委員会のように、既存の組織と新たに結成された棚田に関する組織とが一体となって活動を続けている。

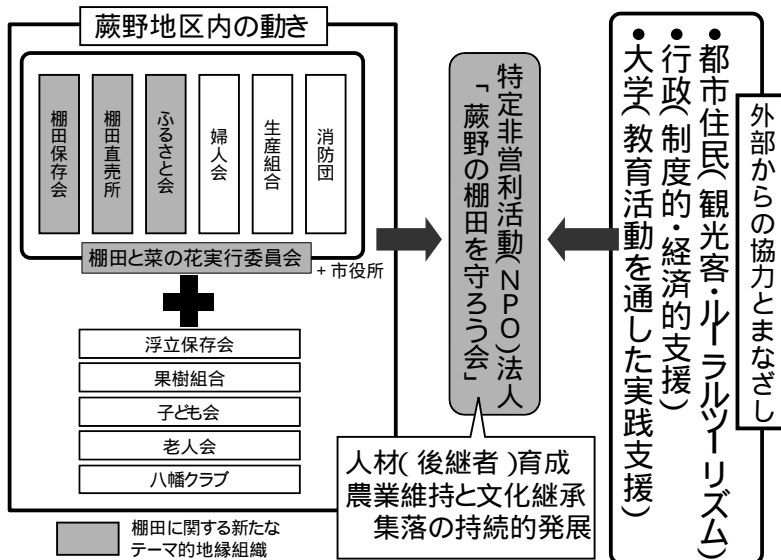


図3 蕨野地区における棚田の保全と地域振興にかかわる組織の関係

(五十嵐(2009)を引用、一部加筆)

各組織のメンバーは互いに重なっており、場合によっては活動主体や領域の境界が曖昧な部分もある。しかしながら、逆に言えば、組織間の連携がとりやすく、状況に応じてフレキシブルに動ける利点を持つ。生産組合や婦人会、消防団など既存の組織と棚田保全を目的とする新しい「テーマ的地縁組織」が、個別に動くのではなく、協働して活動を行うところに、地域コミュニティとしてのまとまりと強さがあるといえる。その背後には、直接的な棚田保全、地域振興に関わるわけではないが、「浮立保存会」による伝統行事「蕨野浮立<sup>12)</sup>」の復活や住みよい蕨野を考える会の結成と住民アンケートの実施、その結果としての五百羅漢をはじめとする地区内の信仰対象物の保存を求めた住民たちの声など、地域コミュニティの伝統を守ろうとする社会的・文化的基盤があり、こうしたこれまで蓄積されてきたソーシャルキャピタルが、新しい地域振興に関する活動の軸とまとまりをぶらすことなく、現在まで継続・発展させてきた原動力といえる。

その一方で、いくつかの課題も抱えている。その一つが人材育成である。国の重要文化的景観選定後に、棚田の保存・管理・活用を目的に設立された蕨野の棚田を守る会では、今後の蕨野地区を担う若手の育成に力を入れている。理事会には、有望な若手を構成メンバーとして選び入れ、会の中心的役割や責任について学ばせるようにしている。また、毎年、棚田サミットに同行させたり、月1回の理事会開催時に勉強会を開くなどして、イベント等の企画力の向上を図っている。このことは、同時に、蕨野地区の農業維持と文化継承<sup>13)</sup>にもつながってくる。しかしながら、最初にふる里会を設立し、現在の棚田保存会や蕨野の棚田を守る会の主要メンバーである60歳以上の住民に比べ、40歳代以下の住民の中には、兼業化や離農のために、こうした取り組みに対してあまり積極的でない者も少なくない<sup>14)</sup>。この世代間での温度差をいかに解消し、蕨野地区の地域振興を担う人材を育成していくかが、最も重要な課題といえよう。

続いて、イベントでの集客と活動資金の調達の課題が挙げられる。図4に、2001～2008年までの蕨野地区における各種イベントの参加者数の推移を示した。イベントは毎年、その数や内容、規模、枠組みが変わるため、また、市町村合併による補助金制度の変更もあり、一概には言えないが、集客力が低下しつつあることは否めない。加えて、これらのイベント活動を含めた各種組織の運営基盤は、今後は、民間からの助成金にシフトすることになる。したがって、複数年間にわたって、安定して助成金を受けることが出来るのか、また、助成金を申請するためのアイデアと企画、その活用方法をいかに継続して、中長期的に計画することが出来るのかが大きな意味を持つことになる。加えて、この点は、2004年をピークに、販売量が頭打ち状態にあるブランド米「蕨野」の今後の販売促進のあり方にも深く関わってくる(図5)。

最後に、外部の組織等との連携である。国の重要文化的景観に選定され、運営のためのNPO法人を立ち上げたことで、蕨野地区は常に外部とのかかわりの中で活動を行っていくこととなった。

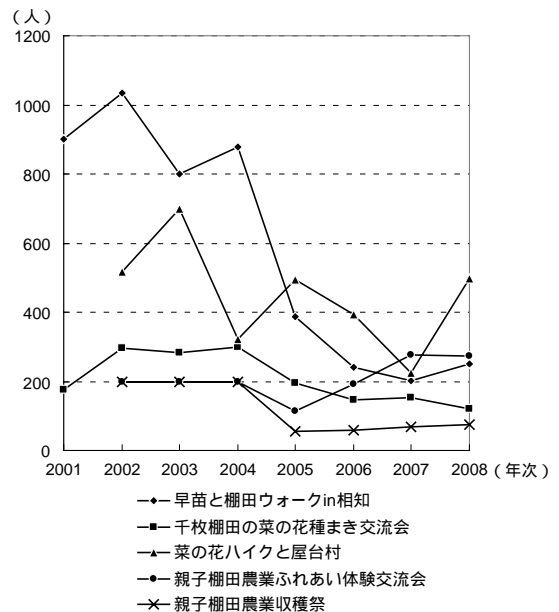


図4 蕨野地区における各種イベントの参加者数の推移(2001～2008年)

(唐津市資料により作成)

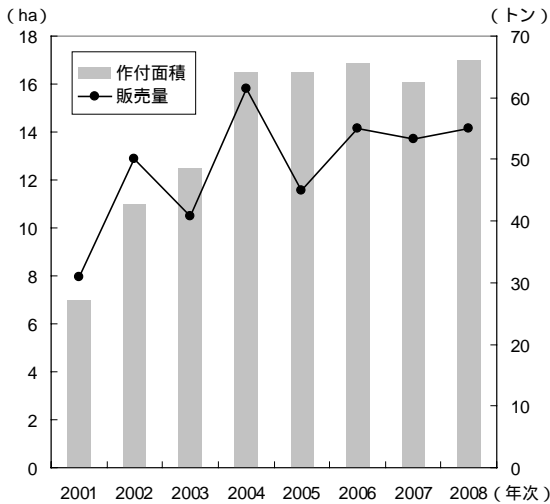


図5 棚田米「蕨野」の作付面積と販売量の推移(2001～2008年)

(唐津市資料により作成)

もちろん、このことは、前述の補助金やさまざまな意見、アイデアの提案等を含めて、地区外部の個人や組織を巻き込みながら蕨野地区の持つ“地域力”を高めていく上で、大きな意味がある。ただし、同時に、外部との協力体制がどこまで安定して継続可能なのか、ということも課題となつてこよう。たとえば、これまで佐賀大学農学部の教員がキーパーソンとなり、蕨野地区との関係を構築し、国の重要文化的景観の選定以前から、同地区の地域振興に関する活動のプレーンとして、これまで述べてきたような後継者の育成、イベントの企画、資金の調達等についてさまざまな助言・指導を行ってきた。しかし、NPO法人設立後は、大学と地元との直接的な関係からNPO法人の活動の内部に大学の関与が内包されるような形に変化してきている。NPO法人が今後、外部の個人や組織とのネットワークを有し、最新の情報をもたらすとともに、それをもとにアドバイスができるようなキーパーソンを継続的に確保し続けることができるのか、あるいは次のキーパーソンを“発見”、“育成”することが可能かどうか、外部との協働体制を維持していく上で大切なポイントとなる。

こうした課題を含めて、これから、蕨野地区が

地域資源としての棚田とその景観をどのように活用し、農村空間全体の価値を高めながら、どのような持続的発展を図っていくのか、さらなるソーシャルキャピタルの高まりとその地域力に注目していきたい。

## 謝 辞

本稿の作成にあたっては、平成19～22年度科学研究補助金「商品化する日本の農村空間に関する人文地理学的研究」(基盤研究(A)、課題番号19202027、代表者：田林 明)の一部を使用した。

基礎資料の収集および現地調査においては、佐賀大学大学院農学研究科首藤和音さん(当時)、そして、なによりも蕨野地区の住民の皆様にご多大なるご協力と有益なご助言を賜りました。未筆ながら、ここに心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 同法第二条第1項第五号による。
- 2) 前掲1)
- 3) 文化庁ホームページ(<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan.html>)参照。
- 4) 2011年9月21日現在、蕨野の棚田を含めて29件の重要文化的景観が選定されている。
- 5) 五百羅漢をはじめ、蕨野地区内には、多くの石仏や石像、石塔、小祠等が祀られている。
- 6) 2000年に、佐賀県農業試験場において、「キヌヒカリ」と「東北143号(「ひとめぼれ」)」を交配して開発された品種米。
- 7) 「早苗と棚田ウォーク in 相知」は、途中、「石仏さまと棚田ウォーク in 相知」と名称を変えながら、現在まで続いている。
- 8) 「親子棚田ふれあい農業体験交流」は、2006年度より「田植え体験交流会」・「稲刈り体験交流会」へと内容を変えながら、現在まで続いている。
- 9) 「親子棚田農業収穫祭」は、2005年度より「親子棚田そば収穫祭」へと内容を変えながら、現在まで続いている。
- 10) 佐賀大学地域創成型学生参画教育プログラム推進委員会編(2008)を参照。
- 11) 大島(1999)は、教育ファームの意義に関して、学校教育における農業や自然、環境問題との繋がり、さらには、教育ファームをとおした都市農村交流 グリー

ン・ツーリズム)の実践の場としての重要性について述べている。また、藤永(2009)は、日本における教育ファームの実践活動について、統計データをもとに考察するとともに、Fujinaga(2010)は、具体的事例をもとに、コミュニティ活性化における教育ファーム活動を含めた地域教育の潜在的可能性について指摘している。これに関して、岩崎(2007)も、食育との関連から、地域コミュニティにおける学校の重要性を示唆している。

- 12) 雨乞いや虫追い、豊作などを祈念する民俗芸能で、太鼓や鐘、法螺貝、笛を鳴らしながら踊る(相知町史編さん委員会 1977)。蕨野地区では第二次世界大戦後途絶えていた。
- 13) 棚田保全に関して、蕨野地区では石積みの技術継承が図られている。同地区には、唯一その技術を継承していた男性がおり、彼は地元建設会社の長年の臨時雇用者であったが、災害復旧等の工事の際に、同社の若い社員に石積みの技術を指導していた。男性はすでに故人となったが、この技術継承が、棚田景観の保全・維持に大きな役割を果たしている。
- 14) 天野(2006)は蕨野地区における集落活性化の動きに関するアンケート調査を行い、世代間の意識の差異を指摘している。

## 参考文献

- 天野洋介(2006) 棚田を活用した中山間地域の集落活性化に関する考察 佐賀県相知町蕨野の棚田を事例に。九州大学文学部卒業論文(未発表)。
- 岩崎正弥(2007) : 食とコミュニティ 学区を焦点に。日本村落研究学会編『むらの資源を研究する フィールドからの発想』農山漁村文化協会。204-211。
- 五十嵐勉監修(2003) : 『蕨野の棚田 日本の棚田百選』佐賀県相知町農林観光課。
- 五十嵐勉(2008) : 棚田の復元と農村の再生。小林英嗣・地域・大学連携まちづくり研究会編『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版。51-55。
- 五十嵐勉(2009) : 日本の棚田の保全管理と活用。海外専門家招聘セミナー, 2009年11月23日 於韓国農村振興庁。
- 井口 梓(2009) : 女性農業者によるチンゲンサイ生産の展開。田林 明・菊地俊夫・松井圭介編『日本農業の維持システム』農林統計出版。211-233。
- 相知町史編さん委員会(1977) : 『相知町史』相知町。
- 大島順子(1999) : 『いのち、ひとみ、かがやくフランスの教育ファーム』酪農教育ファーム推進委員会。
- 唐津市教育委員会(2007) : 『蕨野の棚田 文化的景観保存管理計画 実績報告書』唐津市教育委員会。
- 唐津市教育委員会(2008) : 『唐津 蕨野の棚田 文化的景観保存管理計画』唐津市・唐津市教育委員会・佐賀大学地域創成型学生参画教育プログラム推進委員会編(2008) : 『大学教育と地域創成 佐賀大学の教育実践』国立大学法人佐賀大学。
- 首藤和音(2009) : 棚田保全をめぐるオーナー制度と重要文化的景観 大山千枚田と蕨野の棚田にみる棚田保全運動の可能性。佐賀大学大学院農学研究科修士論文(未発表)。
- 田林 明(2000) : 常総ニュータウンの農業における女性の役割 茨城県北相馬郡守谷町の事例。田林 明・菊地俊夫編『持続的農村システムの地域的条件』農林統計協会。51-58。
- 藤永 豪(2006) : むらの風景が語るもの 世界遺産白川郷を訪ねて。非文字資料研究, 11, 18-19。
- 藤永 豪(2009) : わが国における教育ファームの実践状況と地域的差異。佐賀大学教育実践研究, 25, 107-116。
- 藤永 豪(2011) : 有明海沿岸地域における地域資源としてのルーラリティと商品化。佐賀大学文化教育学部研究論文集, 16(1), 197-205。
- 文化庁文化財部記念物課。魅力ある風景を未来へ 文化的景観の保護制度。 [http://www.bunka.go.jp/bunkazai/pamphlet/pdf/pamphlet\\_ja\\_02.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkazai/pamphlet/pdf/pamphlet_ja_02.pdf) (最終閲覧日: 2010年9月29日)
- 文化庁ホームページ。 <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan.html> (最終閲覧日: 2011年11月2日)
- Fujinaga, G. (2010): Rural Space as a Regional Resource for Education: A Case Study of Education Farm Activities at Elementary Schools in Saga City. *Geographical Review of Japan Series B*, 82, 137-148.